

## ★『多様性社会（Diversity）』を生きていくために★



『多様性（Diversity：ダイバーシティ）』というコトバを、ここ数年でよく耳にするようになりました。障がいのある方や高齢者、LGBTQなどの性的マイノリティなど、社会を取り巻く多様性における課題への取り組みが世界中で推進されています。当然、多様性社会とは、どんな属性・特性・背景をもった人も、『誰もが自分らしく生きられる社会』を意味しています。国際社会のお話は、壮大過ぎて難しいかもしれませんが、まずは『桐商』で『誰もが自分らしく生きることができる』ということができているか、みなさんに再確認してほしいと思います。

また、『Inclusion（インクルージョン）』というコトバも聞いたことがあるでしょうか？これは『受容すること』を指しています。『include（含む・包括する）』という動詞を知っていますね。その名詞形です。『同じ社会や同じ環境の中で、多様な人間が存在すること』を『当たり前』と考え、『一人ひとりがお互いを認め合いながら一体化を目指す』という『社会』や『組織』、『環境』のあり方を示しています。よって、詩人である『金子みすゞ』さんの『みんなちがって、みんないい』という詩のように、『Diversity&Inclusion』とは、『個々の「違い」を受け入れ、認め合い、活かしていくこと』を意味しています。『私』という個性もまわりに認めてほしいし、『まわりのひとりひとり』の違いも同じように認めていく。そして、さまざまな『得意』分野を寄せ集め、それぞれが『自分らしく』生き、ひとりひとりが『生き生きと輝く』ことができるといいですね。そんな桐商をめざしませんか？（校長：星野 亨）

私と小鳥と鈴と 金子みすゞ

私が両手をひろげても、  
お空はちっとも飛べないが  
飛べる小鳥は私のやうに、  
地面を速くは走れない。

私がかからだをゆすつても、  
きれいな音は出ないけど、  
あの鳴る鈴は私のやうに  
たくさんな唄は知らないよ。

鈴と、小鳥と、それから私、  
みんなちがって、みんないい。

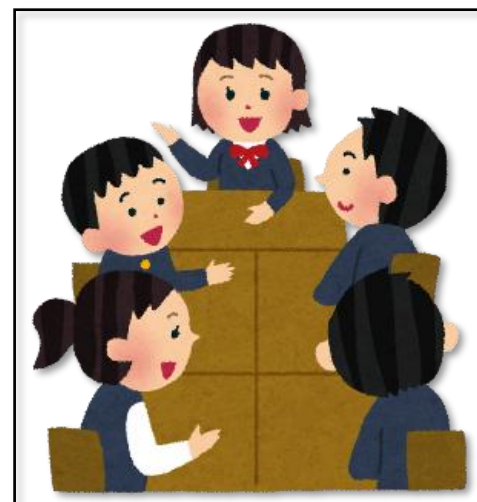




## ★『多数決』の是非 ～『民主主義』の落とし穴～★

ものごとを決めるときに、ついつい採用してしまう『多数決』という方法は『Diversity&Inclusion』を目指すうえで『ふさわしい決め方』なのでしょうか？『マイノリティ』をないがしろにしてしまってもよいのでしょうか？

例えば、文化祭のクラス企画を決める際には、『多数決』が用いられることが多いわけですが、この意思決定では『少数派の切り捨て』になる可能性があります。また、『多数派の意見は絶対』という主張にもなり得ます。このように、少数派の意見を抑圧したまま進行すると、『クラスにモヤモヤが蔓延した状態』のまま、企画を前進させてしまうことになり、『クラスの一体感』を得ることが難しくなるのです。



そこで、『少数派の意見も反映させること』をおすすめします。クラス企画における『答え』に『正解』はありません。否決されてしまった側の人々の意見も反映させ、入れ込むことで『この答えに、クラス全員が納得している』という状態もつくることは可能です。その答えを『納得解』と呼びます。

## ★『納得解』を生み出すためのプロセスとは？★

それでは、『納得解』を生み出すにはどうすればよいのでしょうか？その方法として『対話を通じた合意』が有効だと言われています。もちろん、時間がかかる場合もあります。しかし、『ここまでならお互いに認められる』という合意点を見つけることが重要です。そこから少しずつ『最上位目標（両者が目指すべき共通ポイントの上位）』に向かってレベルを上げ、議論を建設的に進めるのです。そうすると、その後の納得度がぜんぜん違うものが見つかります。『みんなが一步步合意しながら進めていく』、そのコツさえつかんでしまえば、みんなが『当事者』として『一体感』を感じながら、進んでいけるのです。



例えば、『A案では誰かがすごく傷つく、B案ではまた違う人たちが傷つく』という状況では、どちらを選んでも傷つく人がいることになります。そうだとすれば、『これはやめて、誰も傷つかないC案を考えよう』と、さらに対話するのです。お互いが『嫌だと思う部分』を排除していき、『双方がよいと思う部分を残していく』のです。お互いの願いを叶える『共通項』のなかで『一番大きなもの』を探していくことで『納得解』は見つかるはずです。そういった『合意形成の経験』を、たくさんしてほしいのです。対立するのではなく、『対話で合意』していくことが大切です。このチカラは『対話力』『合意形成力』『交渉力』『コミュニケーション能力』とでも言うのでしょうか？このチカラはきっとこれからの社会で役立つ『非認知能力』のひとつです！みなさんもこのチカラの育成を目指してみませんか？

## ★『誰一人取り残さない社会』に向けての第一歩★

『誰一人取り残されない（Leave No One Behind）』という理念は、2015年に国連で採択された『持続可能な開発のための2030アジェンダ』の中核であり、

『SDGs』の根幹をなす精神です。この理念は、貧困、性別、人種、年齢、障害、地域などの違いにかかわらず、すべての人の尊厳と権利が尊重される社会を目指すものです。まずは『桐商』のなかで、『少数派の意見』も反映させ、『誰一人取り残さない』ことを意識してみませんか？みんなの『心理的安全性』の向上にもつながりますよ！（校長 星野 亨）

